

青い目のメリー

私たちは知らんとあかん －戦争の中で生きた青い目の人形物語－

こんにちは。私の名前は、「2代目メリー（愛称）」です。私は今、中町南小学校にいるの。私がどうして多可町にきたのか、なぜ2代目なのか、これから皆さんにお話するね。

私のお話をする前に、『青い目の人形』のお話を聞いてほしいの。それは遠い遠い昔、今から95年前…

〈ギュリック博士と渋沢栄一が繋いだ友好〉

1880年代から1920年代にかけ、アメリカで日本人を敵視した移民排斥運動が起こり、日本とアメリカの関係は悪化していました。

そんな国と国の関係を元に戻したいと、一人のアメリカ人「シドニー・ルイス・ギュリック博士」が、日本の子どもたちに人形を贈ることを考えました。そのギュリック博士と日本の橋渡しを担ったのが、あの有名な実業家「渋沢栄一」だったのです。

〈パスポートを手に、12, 739体の人形が日本へ〉

1927年（昭和2年）3月、アメリカから日本へ、12, 739体の人形が贈られました。人形には、1体1体パスポートを持たせ、乗船券を買い、一人の人として、命と意志を持つ存在として日本にやってきたのです。

青い目に色とりどりの手作りのドレスを着た人形は、渋沢栄一から文部省（現在の文部科学省）を通じて、全国の小学校へと配られました。

〈なぜ人形だったの〉

なぜ、日米関係を良好にするためにギュリック博士は人形を贈ったのでしょうか。

ギュリック博士は、「世界の平和は子どもたちから広がる。子どもたちこそ平和の象徴。」と願いを込め、日本でひな祭りが行われる3月に合わせて、人形を贈ったのです。

博士はアメリカの人々に「友情人形計画」を呼びかけ、賛同した270万人もの人たちが資金を出し合い、人形を用意しました。

人形が贈られた日本各地の学校では、ひな人形と一緒に並べて歓迎会を開いたそうです。

『フレンドシップ・ドール』と名づけられた人形には、アメリカの人たちの平和と友好の願いが込められていました。

第2次世界大戦に巻き込まれていく

日本で歓迎された青い目の人形。でも、歓迎ムードは戦争とともに一瞬で消えてしまったの…

〈槍で突かれ、手足を引きちぎられ〉

青い目の人形が日本へ来たのは昭和2年。その14年後に、第2次世界大戦が始まります。アメリカから来た人形たちは、憎い敵国の人形として、槍で突かれたり、手足を引きちぎられたりして、次々と処分されてしまいます。

〈戦争を乗り越えた341体の人形たち〉

そんな中、戦争を乗り越えて残された人形たちがいました。「人形に罪はない」という心優しく強い人たちによって、隠され、守られたのです。現在、残されている人形の数、全国で341体とされています。平和を願い、命をかけて人形を守った人たちの思いは、今も人形たちの中で生きています。

中町中学校で国際交流が始まる

〈ミドルタウンと中町のつながり〉

青い目の人形の来日から65年後、1992年（平成4年）、旧中町でアメリカ合衆国カリフォルニア州にある町、ミドルタウンとの国際交流がスタートしました。その当時、国際交流を担当したのが、中町中学校で英語の教師を務めていた村井正人先生でした。

村井先生は、ミドルタウンの生徒たちに中町のことを知ってもらいたいと、生徒の家族に多可町の歴史の聞き取りを課題として提案しました。

生徒がおじいちゃん・おばあちゃんから聞いた話に、中町南小学校に贈られた青い目の人形「メリーちゃん」のお話がありました。

村井先生は、中町南小学校に行き、資料を調べる中で、昭和2年に撮影された1枚の写真を見つけます。

そこには、日本人形とともに飾られ歓迎を受けるメリーちゃんが写っていたのです。

村井先生と生徒たちは、聞き取りしたメリーちゃんの話英語に訳し、『中町発世界へ』という1冊の冊子を制作してミドルタウンの学校へ贈りました。

〈2代目メリー来校〉

この本を通して青い目の人形の話を知ったミドルタウンの校長先生が深く感銘を受け、中町南小学校に第2のメリーちゃんを贈ることを計画。

そして平成7年1月27日、中町南小学校に2代目メリーちゃんがやってきたのです。

中町南小学校の足立徳昭校長は、当時の記録を見ながら、「校長室に飾るだけでなく、これからは子どもたちにしっかり事実を伝えなければ」と話します。

〈子どもたちに伝えたい 平和の大切さ〉

2代目メリーちゃんの箱を開けた藤賀幸子さん（当時 中町南小学校勤務）

メリーちゃんを箱から抱き起した瞬間は今でもはっきりと覚えています。閉じていた目が、ぱちっと開いたんです。その感動は忘れられません。歓迎会には、昭和2年の時と同じように、ひな壇を用意して、子どもたちが人形を持ち寄り、飾りつけをしました。

今、ウクライナとロシアの戦争のニュースを見ながら、子どもたちが大きくなった時に、世の中がどうなっているのかととても心配です。メリーちゃんが贈られたことの意味、そして当たり前のことが当たり前ができる日常がどれだけ大切かを、改めて伝えていきたいと思います。

人と人がつながり歴史は再び動き始める

2代目メリーは、長い間中町南小学校の校長室に飾られていたの。そんな私が初めてガラスケースの中から出されることになるの。そこには素敵な出会いがたくさんあったの。

〈渋沢栄一がつかないだ縁〉

多可町地域共生推進協議会では、昨年度から『健康寿命の延伸』をテーマに多可学園で出前講座を開催しており、会長を務める小嶋明さんは、91歳で亡くなるまで生涯現役を貫いた『渋沢栄一』にスポットを当てました。

調べを進める中で、渋沢栄一が外国の人形を抱いている写真を見つけました。

「なぜ、人形を抱いているのか」その疑問を調べる中で小嶋さんが思い出したのが、『中町発世界へ』の中に記されていた青い目の人形の写真でした。

青い目の人形プロジェクトを立ちあげた小嶋明さんはすぐに中町南小学校へ足を運びました。そこで出会ったのが、たまたま令和3年度から中町南小学校で英語の臨時講師として勤めていた村井先生だったのです。

〈悲しい戦争を繰り返さないために〉

国際交流を通じてメリーちゃんの話を書いた村井正人さん（当時 中町中学校勤務）

2代目メリーちゃんを贈ってくださったミドルタウンの校長先生が言われた言葉があります。「友情、平和は永遠のものではない。でも、子どもたちに未来を残してあげたい。

今日は、“West meet East” 大きな記念日だ。」 当時、人と人との交流の中で、初代メリーちゃんが贈られたにもかかわらず、戦争は起こってしまった。子どもに夢を託し、平和を願った人たちの想いに関係なく、争いは起こってしまいます。今、ウクライナで起こっていることもまたそうです。でも、こんな伝えにくい時代だからこそ、伝えていかないといけないと感じています。メリーちゃんのお話を伝えることは、平和を伝え残すことにつながると信じています。

〈こんな時代だからこそつながった〉

青い目の人形プロジェクト代表 小嶋 明さん

不思議なつながりの連続です。初代メリーちゃんが多可町に来ていて、2代目メリーちゃんが、国際交流の中でやって来た。すべての出来事には意味があってつながっています。

ウクライナとロシアの戦争のことがあり、今まで以上に戦争が身近なものになってきたとたくさんの方が感じていると思います。

メリーちゃんと多可町の縁をもっと早く知りたかった！とも思いましたが、このタイミングで巡り合ったことに大きな意味があるように感じています。

先人が命をかけて残した真実。これをいかにして伝え残すか。

今こそ、平和の意味、大切さを伝えていかなければいけません。

青い目の人形フォーラム開催

不思議な出会いが重なって、『青い目の人形フォーラム』開催されたの。たくさんの人に抱っこしてもらってとてもうれしかった。

〈多可郡に贈られた人形の記録〉

中町南小学校でのメリーちゃんの話きっかけに、青い目の人形プロジェクトチームは町内の小学校などで調査を行いました。その結果、中町北小学校の沿革誌に、昭和2年4月11日「アメリカ人形、歓迎会を兼ねてお雛祭りを行う」と記載されていることがわかりました。さらに、昭和26年頃まで中町内の小学校に人形が残っていたこともわかりました。これは、戦禍の中で守られ、大切にされていたという証明でもありました。

また、松井小学校の沿革誌にも、同年4月30日「アメリカ人形来る」とあり、さらに5月10日には、老人会開催に併せてアメリカ人形歓迎会を行ったことも記されていました。

また、西脇小学校の沿革誌にも、同年4月3日に「アメリカ人形の歓迎会を兼ねて雛祭りを行った」と記されていたのです。

〈3月6日、フォーラム開催〉

青い目の人形プロジェクトチームは、「青い目の人形メリーの旅」の著者である西村恭子さんを招き、「青い目の人形フォーラム」を開催しました。

小嶋さんは、共通の知人を通して知り合った西村さんとともに中町南小学校へ出向き、2代目メリーちゃんの話をお聞きました。

その際、西村さんは、「現存する当時の資料がとても貴重である。」と感銘を受けられ、多可町でのフォーラム開催が実現したのです。

フォーラムでは、青い目の人形からつながった町内外の人が集まり、平和の大切さと、次代に伝えていくことの重要性を再確認しました。

〈学芸会でメリーちゃんの役を歌って踊った記憶〉

確か昭和26年、小学3年生の時に、学芸会でおもちゃのマーチを踊ったんです。そのとき、私は青い目の人形役で舞台に立ちました。「青い目をしたお人形は アメリカ生まれの セルロイド… 私は言葉がわからない 迷子になったらなんとしよう」

家でもずっと練習したもんですから、今でもはっきり覚えています。今、ウクライナのニュースを見ていると、とても悔しい。みんな幸せになってほしいと心から思います。

フォーラムに参加した中町南小学校出身のKさんは、当時歌った歌を鮮明に覚えておられました。その歌は、野口雨情作の「青い目の人形」です。終戦から数年が経ち、この歌を歌えるまでに、世の中が少し落ち着いてきていたのでしょう、とKさんは話されていました。

〈平和を願う心はいつの時代も同じ人の想いは確実につながっている〉

西村恭子さん

兵庫県生まれ。放送局、編集記者などを経てフリーに。兵庫県内に残された11体の青い目の人形とアメリカに贈られた「ミス兵庫」に焦点をあて、播磨町から平和大使の任命を受けたメリーとともに辿る「青い目の人形メリーの旅」を発行。

人が出会うときは、約束の時間のようにして出会うんです。一生懸命関わっていると、ふっと大きな流れに出会う。多可町との出会いもそうです。1995年、町と町との交流の中で2代目メリーちゃんが贈られたことは、きっと日本で多可町だけです。

メリーちゃんは、平和・友情の大切さと戦争の愚かさを伝えてくれています。フレンドシップの心は95年経った今も変わりません。人形は、抱っこされることで人の心に入ってきます。ぜひ、これからたくさん抱っこしてあげてください。そして、人形に託された思いを受け継いでください。

〈メリーちゃんが持つ意味をしっかりと心に刻み、伝える〉

那珂ふれあい館 館長安平勝利さん

ほんの95年前、希望ある次世代の平和を願ったプロジェクトが行われました。

しかし、その後、急激な社会変革の中、人々の意識や生活スタイルも大きく変化し、このプロジェクトの持つ意味は忘れ去られつつあります。

「平和」や「多文化共生」が改めて問われている現在、こうした歴史を語り継ぎ、次世代へ繋いでいくことの意味をしっかりと噛みしめて未来を見据えていくことが、今を生きる人々の責務なのではないでしょうか。

青い目の人形プロジェクト

教育総務課、生涯学習課、多可町図書館、那珂ふれあい館、中町南小学校、地域共生推進協議会で構成。

平和への願いが込められた青い目の人形の意味を再確認するとともに、多可町内での青い目の人形の事実を未来へ継承し、生かしていくために、活動を行う。